

Iさん（女性）：

親子で参加できて、とてもよかったです。また、初めてお会いする皆さんと同室で宿泊でしたが、こんなにも早く打ち解けられて、とてもびっくりしました。ありがとうございました。

Iさん（女性）：

ツアーの内容をまったく知らないまま、母についてきてしまいました。そのため、とても驚きました。被災地を訪れることも初めてで、帰ったら、自分で目に見たものを、職場の人たちや友人に伝えていきたいと思いました。

Kさん（女性）：

3月に訪れたときに、今回の栽培予定地と紹介されていたので、ぜひ参加したいと思っていた。前はせり、ふきのとう、白菜をお土産に持って帰った。今回は、大好きな山菜である蕨を採って、お土産にできてとても幸せ。また為朝集落の世話人、茂子さんとの再会もうれしかった。また、被災地の見学では、地元の方の話がたくさん聞けて、とてもよかった。食堂の80歳のおばちゃんのお話は、感動しました。

Nさん（女性）：

昨年6月のライフカフェに参加し、リポーンのリポーンボランティアツアーは2回目でした。今回は福島での状況を見たかったことと、オーガニックコットンに興味があり参加しました。いつも参加して感じることは、参加者全員の意識が高いこと。今回のツアーでも、また自分の生き方を考えさせられるいいきっかけとなりました。4月11日の余震での被害を目にすることができたことが、一番印象深かった。自分にできることは少ないが、できることを考え、実行していきたい。また、今回植えたコットンが、どのように成長していくのか確認したい。

Mさん（女性）：

身近で起きていることに気づいていなかったことに、気づかされた。ツアーに参加して、帰ってから、今後いったい何ができるのかという、生き方の勉強になった。

Kさん（男性）：

福島は初めてだった。被災地の場所・人と出会って初めて、感じるものが多いと改めて実感することができた。ぜひ、また参加したい。

Hさん（男性）：

実際に自分自身で見たり、聞いたりして体感できたということは、替えがたい経験になると思います。また、夜の交流会での他の参加者の方々や壱岐さん、宿のわかだんなの里見さんのお話もとても勉強になり、自分自身で考えて行動することの大事さを教えていただきました。ボランティアに参加すること自体がはじめてだったのですが、リポーンさんのすばらしい企画のおかげで本当に楽しかったです。これを機に、今後も関わっていきたいと思います。

K（女性）さん：

TVや新聞というメディアではなく、福島を自分の目で見てみたかった。そして、やっぱり、自分の目で見るのが大切なんだと感じることができ、よかった。今後はメディアだけではなく、自分の目で確認したい。また、第2の福島を作らないためにも、何ができるか考え、行動していきたい。

Kさん（女性）：

68年生きてきて、色々な経験をしてきたが、被災地を見た時は、何をいついいのかわからず、苦しくなった。今後はもう、このようなことがあってはならない。何度も原発について問題が取り上げられてきたが、何も変わっていないことが悔しい。

Mさん（男性）：

震災後、福島に来ていなかったが、今回はオーガニックコットンに興味があり、参加した。これまでは、仕事で避難をしてきた方の話を聞いてきたが、今回はは逆側（地元に残る側）の話が聞くことができた。この地で生きていくために、出荷する山菜。同じいわき市内でも放射線量はまったく異なる。基準値を下回っていたとしても、市に基準値以上のものがあるとは出荷ができない。また買ってもらえないという現実がとても衝撃的で、もっとも印象に残った。そこで、このプロジェクトは、その風評被害を奪回するためにあるのだということがわかった。

竹前さん：

メディアで目・耳に入ってくる情報は、断片的な情報であるのだと、実感することができた。それぞれの現場には、人（名前）・土地がある。自分を含めて、物事を判断するのに、一部を見て全体を理解した気になってしまうので、気をつけなければならないと思いました。

Mさん（女性）：

天ぷらバス、そしてオーガニックコットン。もともと畑仕事が好きなので、興味をもって参加を決めました。初日は、菜の花サミットに参加し、頭を使い、2日目は体を動かし農作業。そして、3日目には自分の目で被災地を見る。

予想以上にすばらしいツアーでした。

Kさん（男性）：

初日は外せない予定があったが、どうしても、今回参加したかったので、2日目からの途中参加をさせてもらいました。この地でコットンプロジェクトの活動が始まるという場に立ち会いたかったし、参加することができてよかった。ありがとうございました。

もっとも印象に残ったのは、津波の影響を受け、店舗を流された商店主が集い、小学校の校庭に仮設で建設されたプレハブにできた久ノ浜商店街でのこと。「私は絶対に泣かないの」と話をしてくれたお母さんが、ぼくたちとのお別れのときに流した涙。忘れることができません。

今回の経験から、今後、何ができるのかを考えていきたい。

Wさん（男性）：

今回の目的は、「福島の地を踏むこと」「自分の中にあるマイナスなイメージを消し去ること」「福島に住む人々と交流すること」、そして風評被害を少しでも減らしていきたいと思い、「福島を楽しむこと」でした。

実際に行って、自分の互換で感じ、目的を果たすことができました。さらに、エネルギー関連に対する興味があったので、バイオ燃料・菜の花の可能性についてもとても勉強になりました。福島は今、人が誰も住めない状態で土地自体が死んでしまったイメージを世の中が持っていると思います。

須賀川の土手で、たくさんの家族を見ました。子供の無邪気な笑顔、家族のあたたかさを感じました。福島＝幸せな家族。言葉で聞いてもリンクしないことだと思います。

福島を一括にした、現実的な風評被害、これは本当に大きな問題です。

最後に、知人や家族に、「福島はどうだった？」と聞かれたら、「福島は生きている!!!」そう伝えたいと思います。

Mさん（女性）：

2日目までは、桜やこいのぼりをみたり、農作業をして地元の幸せな場面に出会うことができ、とても楽しかった。しかし、3日目は、言葉がでなかった。もっと早く来るべきだったと思った。

はじめ、畑に着いたときは何も気がつかなかったのだが、石取りを終えて、帰りのバスから見えた「まだ手入れのされていない畑」を見たとき、やっぱり、畑は手入れが必要なんだと気がつくことができた。

Nさん（女性）：

震災後、ずっと東北に来たいと思っていた。何度かボランティアツアーに応募したが、定員や悪天候

などでなかなか参加できなかった。そのため、今回とても楽しみにしてきた。そして、今回一番印象に残ったことは、『人との出逢い』だった。自分で感じたことだから、誰かに伝えたいし、伝えることができる。ぜひ、また参加したい。

Kさん（女性）：

昨年から、何度か東北のボランティアに参加してきたが、福島は初めてだった。震災から1年経った分、何かすることがあるのではないかと思っていたが、何ができるのかわからなかった。そんな時、リボンからメールがきて、これは行かなければ行けないと思い参加した。今回も予想以上の体験をすることができた。特に今回は、現地の方と話せたことが、一番の収穫だった。帰ってからは、この体験をたくさんの人に伝えて、たくさんの人をつれてきたいと思いました。

Kさん（男性）：

これまで、新潟の震災ボランティアや宮城のボランティアに参加したが、今回は、復興のあり方について考えさせられた。何度かボランティアに参加してきたが、すぐに収入につながることはできなかった。そして、やはり原発問題の影響はとてつもなく大きいと感じた。その中でこのプロジェクトは有効に活かされてほしい。また、他人事ではなく、自分自身の問題として、関わっていきたいと感じた。

Uさん（男性）：

多くのボランティアに参加してきたが、福島には来ていなかった。放射能の問題が心配だったことも大きかった。1日目のサミットでは、放射能についてとても勉強になった。2日目の遠野為朝集落では、風評被害の現実や水の確保の現状を見て驚いた。また、自分で何かしなければと感じました。

Kさん（女性）：あまりにも吸収したことが多く、まだ頭で整理ができていない。今回は、多くの知識を得たツアーだったと思う。サミットでは、BDF（バイオディーゼルフューエル）、エネルギー問題、4・11の余震の被害について（こんなにも被害がでたことを知らなかった）。放射線量も、バスで少し移動するだけで、こんなにも値が違うことに驚いた。また、遠野為朝集落で食べた、野菜、中でも菜の花の煮浸しは、とろけるほど美味しく、忘れられない。

今後は、循環型社会とはどう作っていくべきなのかを考えていきたい。自分が住んでいる地域は、一体どうなっているのかさえ知らない。まずは、そこを調べることから始めようと思います。